

ダンジョンで聖剣を抜刀するのは間違っているだろうか

クラウド、

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベルくんが火炎剣烈火とワンダライドブックを手に冒険する物語です。ヴェルフに聖剣が作れるスキルを得てもらおうつもりです。

目次

始まりに炎の剣士あり	1
イカズチの剣	8
炎の剣士、篝火のもとで	13
「ステータス」	18
S I D E ●●●●	23

始まりに炎の剣士あり

「はあっ！」

『『『グルオア!!!』』』』

僕は迫りくる三体の半獣半人のモンスターコボルトに剣を構えて走り出す。一体目のコボルトを避け、二体目のコボルトは剣で弾く、そして、三体目に剣を振り下ろす。

——まず一匹。

続いて踵を返し、僕に噛みつこうと迫ってくる二匹のコボルト僕は剣でそれを受け止め、腹に蹴りを入れて離れたところで胴体を切り裂く。

——二匹目。

そして、切り裂いたコボルトの背後から最後の二匹が迫ってくる。僕は突きを放ち、コボルトの頭部を貫通した。

——コレで三匹目。

僕は血のついてしまった愛剣『火炎剣烈火』の血を払うように一振りする。身体から崩れていくコボルトの身体から紫紺色の結晶『魔石』を回収していく。

「ふう、今日も調子がいいな」

五層はまだ早いと思っただけ、これなら、アレを使わなくてもなんとかなりそうだな。

『ヴヴオオオオオオオオオオオ!!』

しかし、突如放たれた凄まじい咆哮でそんな僕の甘い考えは吹き飛ばされた。声の方向を見ると、そこには半人半牛の巨人がこちらに向かって向かってきていた。

「ミノタウロスウウ!!?!」

ミノタウロス、Lv2相当の力を持つモンスター。

なんでこんな上層に!?あのモンスターってもつと下にいるってエイナさんの講習で習ったのに。

ミノタウロスは一直線に僕の方向に向かってくる。完全にターゲットにされてしまったようだ。そのまま拳を振り上げ迫ってくる。

僕は地面を転がり、拳を回避する。

「あつぶな……！」

アレを喰らえば潰れたトマトみたいにペしゃんこだったな。

ダンジョンのモンスターって下から上に上がってこくる事があるなんて聞いてないぞ！Lv1の僕じゃ、アレ相手に逃げられるとは思えないし、仮に逃げられてもコレを上に入れて行くことになるし……。

「——やるしかないか」

神様から誰かに見られると厄介だからあんまりダンジョンでは使わなつて言われてたけど、今回は仕方ないよね。

『聖剣ソードライバー！』

僕が覚悟を決めると、火炎剣烈火がバックルへと変化する。僕がそれを腰に押し当てるとベルトが現れ腰に固定される。さらに、ポケットから手のひらに乗るサイズの赤い本を取り出す。表紙には赤い竜が描かれている。

『ブレイブドラゴン！』『かつて全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた』

取り出すと同時に題名、表紙を開くと内容を一人で読み上げるこの不思議な本、『ワンダーライドブック』。僕は開いたその表紙をもう一度閉じベルトの一番右側のスロットに差し込む。

エネルギーが聖剣に伝わる音が響き、背後には巨大なワンダーライドブックが現れる。僕は火炎剣烈火の柄を握む。そして、勢いよく剣を抜き放ち剣舞を舞う。

『烈火抜刀！』

「変身！」

『ブレイブドラゴン！』

炎を纏って抜剣された火炎剣烈火で十字に振るうと空中に炎の斬撃として残り、背後の本から飛び出してきた赤い竜が僕の周りを炎とともに旋回する。そしてその炎が消えると僕の姿が仮面の戦士のものへと変わる。左半身が僕の周りを飛んでいた竜をもした鎧で覆われ最後にさつき放った斬撃が仮面に刻まれる。

『烈火一冊！』『勇気の竜と火炎剣烈火が交わりし時、真紅の剣が悪を貫く！』

『火炎剣烈火』

それは火炎剣烈火の抜刀と同時に新たなページが展開されたブレイブドラゴンに記された戦士と同じ姿だった。

——その戦士の名は、セイバー。

「行くよっ、火炎剣烈火ッ！」

愛剣の名を叫びながら僕は強化された脚力で地面を強く踏みしめ駆け出す。

「はあっ！」

変身し強化された脚力で地面を切ってミノタウロスに肉薄し、胴体を斬りつける。炎を纏った斬撃によって傷口が燃え上がり、ミノタウロスは絶叫を上げる。

僕は追い打ちをかけるようにドライバーで展開されたブレイブドラゴンのページを押し込む。

『ブレイブドラゴン！』

「ドラゴンワンダー！」

右手に炎が収束し、それが竜の姿となってミノタウロスに襲いかかった。全身に火傷を喰らい膝をつくミノタウロス。

「一気に決める！」

『必冊読破！』

ドライバーに火炎剣烈火を収め、柄にあるトリガーを引く。そして、再び勢いよく剣を抜剣する。

『烈火抜刀！』『ドラゴン！一冊斬り！』『ファイアー！』

「火炎十字斬！」

炎の力を極限まで高めた火炎剣烈火を構え、一気に駆け出す。

「はあああああああああ!!!」

縦横無尽に走り回り、ミノタウロスを斬りつけていく。燃え上がる

剣に何度も斬りつけられミノタウロスは絶叫とともに崩れ落ちた。倒れたミノタウロスの身体が崩れ、あとには鮮やかな色の石——魔石——が残る。

「ふう……。」

火炎剣烈火を肩に担ぎ僕はキョロキョロとあたりを見回す。

「誰も見てない、よね？よか「あの……。」った？」

ギギギと擬音がなりそうな音で背後を振り返る。

そこにいたのは、金髪の女性。整った顔立ちの、おそらくは僕とそう年の違わない長い綺麗な金髪が特徴的な人族の女性だった。その手に握られた細剣からして彼女もまた冒険者なのだろう。しかも、何処かで見た覚えがある、まだオラリオに来たばかりの新米冒険者である僕に見覚えがあるってことは多分ギルドの掲示板かなにかで見たと思う。つまり、かなりなの知れた上級冒険者。

多分、仮面の下の僕の顔はコレ以上ないほどに間抜けな顔になっているだろうと思う。だけど、啞然と知られていたのは一瞬だった。

「見てました？」

「……うん」

「何処から、ですかね……？」

「貴方がミノタウロスを押してるところから、かな？」

なるほど、つまり変身を見られたわけじゃない。正体が知られたわけじゃないと。……よし、今ならまだなんとかなる！

『猿飛佐助！』『ふむふむ……』

僕は反射的に腰のホルダーに収めてあった緑色のワンダーライドブックを火炎剣烈火の剣先の銀色のマークにかざし、そのままトリガーを引く。

『習得一閃！』

「ッ!？」

僕の身体は剣から放たれた疾風が僕の姿を隠した。突如放たれた、疾風に金髪の女性は目をつむり、そのスキにワンダーライドブックの力で壁に同化して隠れる。いわゆる、隠れ身の術と言うやつだ。

「あれ?？」

一瞬で目の前から消えた僕に女性はキョロキョロとあたりを見回す。逃げ切れるかどうかまだわからないからここで息を潜めて隠れることにした。ヘファイストス様と椿さんがいうには第一級冒険者でも初見では気づかれないほどに気配も消せるらしい。

「おい、アイズ。ミノタウロスはどうした?？」

「あつ、ベートさん……。」

すると、金髪の女性を追ってきたのか今度は鋭い目つきが印象的な銀髪の狼人の男性が現れる。獣人って確か嗅覚が鋭いよね?しかも、この人も絶対強い。気づいてないよね?バレないよね?」

「片付けたんならとつと戻るぞ」

「あつ……。」

狼人の男性の方はすぐに身を翻し、女性の方は僕を探しているのか少し視線を右往左往させるが、僕の姿は見つけられずに仕方なく男性の後を追う。姿が完全に見えなくなると、ライドブックの力を消して姿を表す。

「……生きた心地がしなかった」

ドライバーで展開されたブレイブドラゴンのワンダーライドブックを閉じてドライバーから引き抜くと、変身が解除されもとの僕の姿へと戻った。

「なんとか正体がバレずによかったあ……。」

安心して脱力し、壁にもたれかかる。そして、手の中にあるブレイブドラゴンと猿飛忍者伝、二冊のワンダーライドブックを見る。コレは僕に凄い力を与えてくれるけど……神様たちいわく他の神様に知られたらどんな手を使ってでも引き入れてもおかしくないほど珍し

いスキルらしいからホントにバレなくてよかったあ。

「きれいな人だったなあ、何処で見たんだっけ？……そういえば、ミノタウロスの魔石……持っていていかなかったよね？」

ひよつとして、まだ近くにいたの感づいて譲ってくれたのか。これ、持っただけでもいいよね？僕が倒したんだもんね？でもレベル1の僕がこんな物持ってたら怪しまれるよね。

元々、ミノタウロスレベル2相当のモンスター。本来なら僕が絶対にかたない相手だったけど、ホントに不思議な剣だよね、この剣。ベルトになったり、本を読み込んだり。

「そういえば、ヴェルフ。うまくいってるかな？」

剣といえば僕はこの剣について神様の神友である鍛冶神ヘファイストス様のもとへいったとき知り合った鍛冶師の友人のことを思い浮かべる。『今ならすげえ剣が撃てそうな気がする！』って言って、僕からワンダラーライドブックを二冊借りていったけど……。

今日はこのへんでもどって様子を見に行こうかな。

イカズチの剣

迷宮都市オラリオ。

『ダンジョン』と通称される地下迷宮を保有する、いや迷宮の上に築き上げられた巨大都市。

都市ひいてはダンジョンを管理する『ギルド』を中核にして栄えるこの都市は、ヒューマンを含めるあらゆる種族の亜人が生活を営んでいる。

と、学の乏しい僕が説明できるのはこのくらい。

そして、その『ダンジョン』にそこから得た収入で生計を立てている人間を総じて冒険者と呼ぶ。僕『ベル・クラネル』もまたその一人だ。

僕は今、ダンジョンでの探索をいつもより早く切り上げてオラリオで双壁をなす鍛冶系ファミリア「ヘファイストス・ファミリア」の工房にきている。平屋が並ぶその場所はオラリオの端だからか、まだ日が高いのに薄暗い。それぞれが与えられた工房で鉄を打つカーンと言う音があたりに響く。

「えっと、確か……。」

僕は以前一回だけ来たことのある彼の工房の前で足を止めた。

僕がその扉を開くと凄まじい熱が僕の肌を焼く。

凄まじい炉の熱が離れた場所にいたベルにも届く。まるでここだけ空間が違うかのように温度が違った。

そして、その炉の前で一人の鍛冶師が鉄を打っていた。炉に燃え盛る炎と同じように赤い髪、浅く焼けた褐色の肌。その手に握られたハンマーで刃を打つ。

見てみると、そこにあつたのは僕の身の丈ほどある巨大な剣。

「ん、ベルか？」

「あ、ごめん。邪魔して」

「いや、気にすんな。丁度終わったところだ」

一通りの作業が終わったのか、ハンマーを下ろす鍛冶師。

そして、さつきまでの鬼気迫る表情から一転ニヤリと笑顔になって

僕の方を向く。

彼の名前はヴェルフ・クロツゾ。「ヘファイストス・ファミリア」の本人言うところによればまだ下っ端の鍛冶師、らしい。以前一度だけ僕の火炎剣烈火を鍛冶の神である彼の主神であるヘファイストス様に見てもらおうとそのホームに行つたとき偶然知り合つた。

僕がこの迷宮都市で初めて出来た友達だ。僕の火炎剣烈火と、ワンダライドブックについて凄く興味深そうにして、僕から本を借りて工房にこもっていた。

「その剣が、前に言つてたすごい剣?」

「いや、ちよつと違うな。だが、出来てるぜ。俺のこれまでの人生最大の傑作がな!」

そういつてヴェルフが持つてきたのは一本の剣、僕の火炎剣烈火とそっくりだが刀身が赤ではなく黄色で、つけられているエンブレムも僕の烈火の炎のような形をした赤いエンブレムではなく、稲妻のような形をした黄色のエンブレム。剣先の銀色のマークまで同じだ。

「僕の火炎剣烈火にそっくりだね」

「俺もなんでこんな形になつたかはわからないんだけどな、なんか、剣の音が聞こえた気がするっていうのかな。気づいたらこいつが出来てた」

「もしかして……。」

僕は火炎剣烈火と同じ銀色のマークにポケットから取り出した黄色のライドブックを翳してみる。

『ヘツジホッグ!』『ふむふむ……』

「ライドブックを読み込める!」

「おう!自分でも驚いたぜ、まさか、こんな剣を作れるとはな。おまけに魔剣みてえに使つても砕けねえし、ヘファイストス様にはお前の烈火も総じてその本の力を使える剣を『聖剣』って呼ぶのはどうかって言われたよ」

『聖剣』か、なんかかつこいいね!」

「ベル、この剣はお前が持つててくれ」

「いいの?こんな凄そうな剣?」

「元々、お前の本がなきや完成しなかった剣だ。それに、俺は単純にお前がその剣で戦うところが見てみたい」

「わかった、ありがたく使わせてもらうよ」

僕はヴェルフに差し出された黄色の剣を受け取る。うん、なんだかしつくりくる感じがする。それをキラキラした目で見てみると、ふと聞き忘れたことを思い出す。

「この剣、名前は……?」

「候補が二つあるんだ、一つ目は『ビリビリ丸』——「却下!」——即答かよ。」

ヴェルフが言い終えるよりも前に間髪入れずに拒否する。流石にそれはダメ、だって片手に火炎剣烈火、片手にビリビリ丸はいくらなんでも……。

「まあ、本命は別にあるんだ」

ヴェルフはその剣を取り、刀身を見つめその本命の名前を僕に告げる。

「——『雷鳴剣黄雷』、なんてどうだ?」

「イカズチ、雷の剣、いいね!凄くいい!」

雷鳴の剣、黄雷——なんだかすつごいしつくりくる!

「だろ?それにこの剣、この本に共鳴するように時々ビリビリ帯電しててな」

そう言つてヴェルフは僕が預けていた三冊の本のうちの一冊、魔法のランプが描かれた『ランプ・ド・アランジーナ』のワンダーライドブックを僕に差し出す。

「多分だが、火炎剣烈火とブレイブドラゴンみたいに本と剣には相性があるんじゃないかと思うんだ」

確かに火炎剣烈火は『ブレイブドラゴン』のワンダーライドブックを使わなければ変身できない。赤い剣と赤い本で相性がいいってことかな程度には思つてたけど。

『ランプ・ド・アランジーナ』を受け取りながら、そんな事を考える。「そういえば、渡した本って三冊あったよね？」

ワンダーライドブックには大きく分けて三つの種類がある。『神獣』、『生物』、『物語』の三種類だ。それぞれソードライバーのスロットに指す場所が決まっている。『神獣』は一番右、『生物』は中央、『物語』が一番左、使った場所によって装備も変わるようになっていく。

ヴェルフには『神獣』ジャンルの『玄武神話』、『生物』ジャンルの『ライオン戦記』、そして『物語』ジャンルの『ランプ・ド・アランジーナ』を預けていた。

「残りの本はどうしたの？」

「ああ、残りの二冊も今作ってる剣と共鳴してるみたいでな、悪いけどしばらくは返せそうにないんだ」

「いいよ、全然。他にも本は沢山あるし」

「……お前、それ一種の魔導書だってわかってるか？」

魔導書、使用した人間に魔法を発言させる使い捨ての魔導具。僕は現物を見たことはないけど、物凄く高価らしい。確かに、使用者に魔法にも似た力を与えるワンダーライドブックは確かにその一種かもしれない。

「そんなこと言ったらこの剣も一種の魔剣でしょ」

「相場だと魔導書のほうが高いぞ」

「あ、そうなんだ」

僕のは使い捨てじゃないから見方によってはそれ以上の値がつくので、バレたら間違いなくどこか派閥が取り込みに来ると言ってたから僕はこの本の力を今日みたいなのが無い限りあまり使っていない。

——今日は剣を受け取り、ヴェルフに礼を言うと僕は彼の工房をあとにした。

「さて、俺もこいつを完成させるか」

ベルが去った工房でヴェルフはさつきまで自分が打っていた大剣

を見る。そして、ポケットから彼から借り受けた『玄武神話』のワン
ダーライドブックを取り出し強く握りしめた。

炎の剣士、篝火のもとで

ヴェルフから『雷鳴剣黄雷』を受け取りギルドでの換金を終った僕は、えメインストリートを抜け、細道をいくつも曲がりベルは目的の場所にたどり着いた。

そこにはもはや廃墟といっても刺し違えのないもの、かつては神様たちを々を崇めるために作られたはずの教会は人々の記憶から忘れ去られた哀愁が漂っていた。

正面玄関にあるボロボロの女神の像は顔が崩れながらもほほえみながら僕を見下ろしている。

中に入るとそこは外見に負けず劣らずの半壊状態で割れた床のタイルからは雑草が繁茂している。崩れた天井の大穴から、まだ日が高い陽光が覗いている。

僕はすたすたと部屋の奥に行くと地下室へと向かう階段を降り始める。

そして、地下室の扉に手をかける。

——その扉を開くと歪んだ空間が広がっていた、床、壁、天井全てが本棚に覆われている。その異常な空間に僕は一切戸惑うことなくそこへ飛び込んだ。僕の体は浮遊し、一人での空間の奥に向かっていく。最初は不思議だったその感覚もいつの間にか慣れていった。

しばらくの浮遊の空間が切り替わり目的地の廊下に出た。そのまま真っすぐ進み、扉を開くとそこはまるで図書館のような部屋、本棚が並んだ二階から一階が見下ろせるようになっており、一階の中央には様々な機器が繋がれた大きなテーブルがある。更には僕より大きな本が壁の周りに何冊も並んでいる。

「あつ、ベル君おかえり！」

部屋を一度ぐるっと見回すと二階の本棚を見ている小さな人影があり、その人物は僕が部屋に入ったのを見て手すりから僕を見下ろすと、とてとてと階段を降りてくる。

僕の前に走り寄ってきたツインテールがトレードマークの彼女こそ僕の主神、神へステイア様だ。

「只今戻りました神様」

「今日の収穫はどうだったんだい？」

「いつもどおりですけど、ちよつとイレギュラーに巻き込まれて変身しちゃいました」

神様に報告しながら僕は入り口から一番手前のパネルの付いた引き出しを引く。そこには鉄製の小さな本棚があり、丁度ワンダーライドブックがすっぽり入るくらいの大きさだ。僕はポケットから『ニードルヘッジホッグ』、『猿飛忍者伝』そしてヴェルフから返してもらった『ランプド・アランジーナ』を取り出し収納する。

『ニードルヘッジホッグ！』

『猿飛忍者伝！』

『ランプド・アランジーナ！』

こうしておけば無くす必要もないからワンダーライドブックは基本ここに収納している。

「イレギュラーって？」

「五層でミノタウロスに遭遇してしまいました……。」

「そつかあ、ならしやうがないね……。なにせよ君が無事で本当に良かったよ。君が死んだら僕は途方に暮れてしまうからね」

「大丈夫です、伊達に『リベラシオン』で修行してませんから」

神様を安心させるために胸を張ってそう答えると、神様は優しく微笑んでくれた。すると、何かを思い出したようにテーブルの縁の箱を見る。

「あつ、そういえばベル君。新しい本が出来てたぜ」

「本当ですか!？」

僕は神様の言葉を聞くと箱に駆け寄り、中に入っていたワンダーライドブックを取り出す。今朝まで何も書かれていなかったブランクの本が青色に変わっていた。

『ピーターファンタジスタ！』

僕は新たに完成したワンダーライドブックを取り出すと代わりに何も書かれていないブランクのブックを代わりに収納しておく。こうしておくといつの間にか新しいワンダーライドブックが出来て完

成するとひとりでに箱が開く仕組みになっているようだ。

新しく完成した本は青いワンダーライドブックで表紙である『ガードバインディング』には手をつないだ少年少女の姿が描かれていた。ジャンルは……『物語』か。

「それにしてもここは本当にすごいよね、見たことがない本が沢山あるし聞いたこともない知識が山のようにある。ボク達にとっては宝の山だよ」

この場所は寝室もシャワーも教会よりも遥かにいい、実質こっちが僕たち「ヘステイア・ファミリア」のホームと言ってもいいかもしれない。

寝室に入ると、そこには一人の小さな女性が室の良いベッドで横になり広場にあった本を読みふけていた。僕が部屋に入ったのに気づいた彼女は

「それにしてもここは本当にすごいよね、見たことがない本が沢山あるし聞いたこともない知識が山のようにある。ボク達にとっては宝の山だよ」

「ハハハ。まあ、僕も良くはわかってないんですけどね」

——一年前のあの日、おじいちゃんが事故で亡くなった日変な男の人が現れた。

その人はピンクの帽子にピンクのシャツ、そして肩当て付きのジャケットを着た恐ろしく派手な格好をした男性でちよび髭とメガネが特に印象に残った。その人は、唐突に僕に一冊の本の渡してきた。

『ボンヌレクチュール、僕はタツセル！ベル・クラネル君、君にコレをプレゼントしよう！』

そういつて男の人が僕に渡してきたのは『ブックゲート』という題名と穴のような絵が書かれていたワンダーライドブック。

『これをなんでもいいから扉の前で開いてみると面白いことが起きるよ〜！』

『面白いことってなに……って、あれ？』

うつむいて本を見ていた僕が視線を上げると、既にその人の姿はなかった。

そして、男の人に言われたとおり扉の前で本を開くとこの空間に繋がりにそこに火炎剣烈火とワンダーライドブックがあった。

初めて火炎剣烈火を手にしたときのことはよく覚えている。まるで自分を待っていたかのように二階の奥の部屋に突き立てられていた烈火、僕もまたこの剣を探し求めていたような感覚に襲われた。そしてなぜか最初から使い方を知っていたようにセイバーへと変身することができるようになったのだ。

それから僕は一年、この場所に居座った。本を読み漁ったり一階の奥の部屋、修練場『リベラシオン』で修行したりして半月前にオラリオにやってきた。

昔、おじいちゃんが話してくれた英雄の生まれる場所、『オラリオ』。僕もおじいちゃんがよく読み聞かせてくれた英雄譚に出てくる英雄のようになりたいくてこの場所に来た。

そこで僕はヘスティア様に誘われ、彼女の眷属になった。

『ブックゲート』で作った入り口は僕の意思で固定も解除もできるらしく今はこのホームの地下室の入り口に設定してある。

「さて、そろそろ夕ご飯にしようじゃないか。今日は売上が良かったからジャが丸くんをボーナスでもらったんだ」

「あ、すみません神様、夕食前に『リベラシオン』に籠もっていますか?」

「えっ!?!ま、またかい!?!」

夕飯の支度をしようとして部屋を飛び出そうとした神様は呼び止めた僕の言葉にぎよつとする。

「大丈夫ですよ、夕食までには戻ります。こっちはすぐですから」
「でも……君あそこに籠もるとダンジョン潜ったあとよりボロボロになって出てくるじゃないか……。」

修練場『リベラシオン』、外の空間とは断絶された場所で外と中とでは時間の流れが違うので修行にうってつけではあるがその分精神力を消費する故に危険な場所でもある。

「大丈夫です、少しずつだけコツも掴めてきたので」

「……ほんとに気をつけてくれよ。君に何かあったら僕は悲しいぜ」

「はい、わかっています」

神様にお許しを得ると僕は引き出しの中の本棚から二冊の赤いワ
ンダーライドブックを取り出す。

『ストームイーグル！』

『西遊ジャーニー！』

一つは勇ましい大鷲が羽ばたく姿が描かれた『生物』ジャンルの本
『ストームイーグル』、そしてもう一つは雲に乗った猿とその仲間たち
が描かれた『物語』ジャンルの本『西遊ジャーニー』。そして、僕が持
つ『神獣』ジャンル『ブレイブドラゴン』で三冊の赤い本が揃った。
「早くこの力を使いこなせるようにならないと……。」

二冊の赤い本を強く握りしめ僕は『リベラシオン』への扉をくぐつ
た。

【ステータス】

「はあ……はあ……。」

「もう言わんこつちやないんだからあ……。」

「す、すみませえん……。」

情けない声で僕に肩を貸してくれる神様に謝罪する。リベラシオンから出てきた僕は神さまの言うとおりにボロボロになって出てきて、歩くのもつらい状態だからだ。

あれから外の空間では多分十分くらいだと思いが、僕はリベラシオンの中でもかなり深い場所で修行していたのでおそらく五時間以上ぶっ続けで修行していたと思う。

リベラシオンは深い場所ほど外での時間の流れがゆっくりになる、その分精神力の消費は凄まじいがそこで普通の鍛錬をするだけなら僕はもう慣れた。

だけど、流石にコレの修行はこたえると、腰のソードライバーにさされた三冊の赤いワンダーライドブックを見ながら思う。おかげで歩くのもままならずこうして神様の手を煩わせてしまっている次第である。

「ホントに大丈夫かい？」

「はい、リベラシオンから出たおかげでもうだいぶ楽になりました」

寝室に連れてこられた僕は室の良いベッドに座らされる。火炎剣烈火を手にしてから身体能力だけじゃなく、回復力も異常に上がったし『リベラシオン』の中に比べたら外の空間はいるだけで体力が回復するくらい楽だ。

「そうか、じゃ、今のうちにステータスの更新やっちゃおうか」

「そうですね」

「じゃあいつものように服を脱いで寝っ転がっちゃって〜」

神様の言葉に同意して僕は上半身に着込んだアーマーやインナーを脱ぎ去る。寝室にある大きな姿見に僕の背中が映し出されている、そこにあるのはびつしりと書き込まれた黒い文字群。

これが神々に恩恵を受けたという証、その神の家族。すなわち【神

の眷属（ファミリア）になったことの証だ。

僕はうつ伏せになってベッドに寝っ転がるとピョンつと僕の背中にのり僕の背中を二度三度撫でる。そして、チャリという金属音が背後から聞こえる。神様がご自身の指に針を指して血を流しているのだろう。

神様たちが扱う【神聖文字（ヒエログリフ）】は自らの血を媒体とすることで対象の能力を引き上げる。

そして、様々な経験から得られる不可視の【経験値（エクセリア）】というものを使って、【恩恵】を付け足し塗り替え、強化するそれが【神の眷属】の成長ということだ。

僕たち冒険者はモンスターを倒すことで得られる【経験値】をもとに自身を強化してダンジョンに潜るといなのがオラリオの一般的な常識だ。

「ごめんねえ、こんないい場所で暮らさせてもらってるのに君にばかり負担をかけさせて。」

「気にしないでくださいよ、神様だってアルバイトを頑張ってくれてるじゃないですか」

もう分かると思うが、現在のこの【ファミリア】の眷属は僕一人だ。

神様は最近天界から地上に降りてきた神様で、眷属が見つからず神友であった【ヘファイストス・ファミリア】で世話になっていたらしいがいい加減に追い出されて途方に暮れていたところで僕と出会ったらしい。

ここに繋がる廃教会はヘファイストス様が最後にくれた慈悲らしい。

本来、眷属は神からもらった恩恵に報いるために神様を養う必要があるが、知つての通り暮らしこそいいものの僕らは零細ファミリア。神と眷属、それぞれが働くことで生計をたてているのだ。

「はい、もういいよ」

神様は用紙に僕の背中中の【神聖文字】を写すと、今度はそれを【共通言語（コイナー）】に書き換えを始める。僕は【神聖文字】なんて読めないからね。

その間に着替えると神様が書き終えた僕のステータスの写しを僕に渡してくれる。

ベル・クラネル

力：F	3 4 2 ↓F	3 9 4	耐久：G	2 3 2 ↓G	2 3 5	器
用：G	2 2 2 ↓G	2 8 2	敏捷：F	3 4 7 ↓F	3 7 3	魔力
E	4 1 2 ↓E	4 7 3				

《魔法》

□

《スキル》

【仮面ライダー聖刃（セイバー）】

・ 火炎剣烈火とワンダーライドブックを使い仮面ライダー聖刃へと変身できる。

・ 変身中ステータスが大幅上昇。

・ 変身による戦闘で得られる【経験値】の獲得量上昇。

「相変わらず早い成長だねえ、今回は変身したってこともあつて経験値の量も多いしね」

「やつぱり、そうなんですかね……。」

はつきりつて僕は成長が早いと言われてもまだよくわからない。なにせ、僕以外の人のステータスなんて見たことがないからだ。でも前にコレをみたヘアアイス様額を抑えていたので普通じゃないことだけは確かだと思う。

「ああ、そうそう。わかつてると思うけど、人目のあるところで派手に変身しちゃダメだぜ？神なんてどいつもこいつも君のことを知ったら何をやらかすかわからないやつぱりなんだから」

「わかりました、神様！」

「よし、それじゃあ夕食にしよう！」

神様は僕の言葉に満足気に頷くと、キッチンに向かって歩き出す。僕もその後を追いかけていった。

~~~~~

『聖剣』?』

「はい、僕の火炎剣烈火やヴェルフが打った雷鳴剣黄雷みたいなワンダーライドブックの力を引き出せる剣のことをヘファイストス様がそう呼んでいるそうです」

僕は夕食の途中で今日ヴェルフの工房で話したことを神様に伝えていた、『聖剣』という名前のこと、『雷鳴剣黄雷』のこと、そしてヴェルフが新たに二本の聖剣を打っていること、そして、剣とワンダーライドブックは共鳴関係にあるらしいことのできるだけ細かく説明した。

「流石はクロッゾってことなのかなあ……。確かに数回使うと壊れる『魔剣』とは似て非なるものだから、そのほうがわかりやすいね。……。しかし、この場所といい剣といい本といい一体何なんだろうね?」

神様の言葉に僕も心のなかで頷く。成り行きで手に入れた本と剣だけど、それに関する謎は未だに尽きない。

因みにこの空間のことはまだ神様にしか話していない、もちろんヴェルフやヘファイストス様も同じだ。神様いわく、この場所のことを知れば間違いなく奪いに現れる派閥が現れるとのことだ。ヘファイストス様達を信じていないわけではないが、情報の漏洩はできるだけさけるべきだと神様と僕の総意だ。

この力は強大でたしかに誰もが求める力だと思う。しかし、その中にはこの力を悪用しようとするものも現れるだろう。だけど僕は絶対にそんなことはしない、おじいちゃんと神様に約束した。この力を正しく使い必ず『英雄』になると。

僕は『ブレイブドラゴン』のワンダーライドブックを強く握りしめ改めてそう決心した。

「ッ!」

——その瞬間、僕の脳裏に誰かの姿が映った。



白く長い髪の女性、逆光のせいなのか顔はわからない。その人は僕の頭を撫でるとどこかへと去っていくようにする、幼い僕はそれを呼び止めようとして何かを叫んでいる。

すると、女の人は一度こちらを振り向き僕に小指だけを開いた右手を差し出す、僕はそれに答えるように同じようにした右手を差し出し自身の小指と女の人の小指を絡める。

東洋で伝えられているゆびきりげんまんという約束をする時の風習だ。

「ハッ………」

そこで脳裏に流れる映像が途切れ、意識が現実に戻ってくる。目の前ではじゃが丸くんを食べる神様の姿が映った、どうやら僕の異変には気づいていないようだ。

何だったんだ今の……僕の、記憶？ だけど、僕はあんな女の人、あつた覚えがないし……。

「あつ、そうだベル君」

「！はい、なんですか神様？」

「君明日はダンジョン潜るの終わったたら外で外食でもしてきなさい」「え？」

「君最近、あの部屋にこもりっぱなしでほとんど休んでないからね。たまには休んで外で美味しいご飯でも食べなさい。僕も明日はミアハ達でも誘つてどこかで食べてくるから」

「……そう、ですね。わかりました、神様」

最近ずっとダンジョンに帰ったら『リベラシオン』にこもって修行のルーティーンだったので休む時間がなかったというのはたしかにそのとおりだ。おまけにあの修行を始めてからいつもボロボロになって出てくるから神様にも心配をかけてしまったと神様の言うことに素直にうなずいた。



——時空の狭間。

オラリオの存在する世界とも●●●●ワールドとも違う次元に存在する異世界。どこまでも砂丘のような砂の足場が続く寂しい世界に砂の色にも負けない白い外套をかぶった男がそこに立っていた。

男は頭上に輝く太陽のような眩しい光を見つめる。

『…………。』

「——来たか」

男は背後の砂を踏む音に背後を振り向く。そこにいたのは紫の鎧を身に纏った鉄仮面の剣士、右肩には龍の頭部が模されており、そのシルエツトはまるでベルが変身するセイバーを彷彿とさせる。しかし、その手に持っている剣はセイバーの『火炎剣烈火』とは似ても似つかない禍々しいオーラを放っている。

——その剣の名は『闇黒剣月闇』。●●●●ワールドで生まれた始まりの剣の一太刀。

紫の鎧の戦士は外套の男のもとに歩み寄る。

「久しぶりだな、『闇の剣士』カリバー」

『——私をその名で呼んでくれることを感謝しよう。我が唯一の友、『光の剣』』

明らかに地声ではないどこかくぐもった声で男『光の剣』の言葉に答える『闇の剣士』カリバー。

『——あの小僧がオラリオで活動を始めた』

「そうか…………ついに動き出したか、『英雄の物語』が」

『そうなるかはあの小僧次第だ』

カリバーの唐突な報告に『光の剣』は感慨深げに再び空を眺める。

「あれからどれほどの時間がたった?」

『…………五年だ』

「酷く長い五年だったな…………俺がここにいたのが一瞬に思えるほどの」

『——お前とビクトールには感謝している…………お前たちが●●●●』

●●と残してくれた『火炎剣烈火』のお陰で未来を変えられる唯一の可能性を残してくれた』

「カリバー……。」

『グッ……！』

「カリバー!?!」

男がカリバーに語りかけようとした瞬間、カリバーが突如胸を抑えて地面に座り込む。『光の剣』は同じようにそばに座り込み心配そうにその肩に手をおいた。

「お前の体はすでに……。」

『……まだ終わるわけには行かない。あの小僧が私の、いや、私達の望む次元にたどり着くまでは』

『光の剣』に肩をかされながら立ち上がり、意思のこもった口調で話すカリバー。

「なかなか酷なことを言うな……それはお前にもできなかつたことだろうに」

『超えてもらわなければ困る……それが私が今に至るまで生きている唯一の理由なのだから』

「しかし、残りの剣士はどうする?」

『問題ない、すでに残りの三人は見つけ出した』

カリバーは懐から三冊のワンダーライドブックを取り出す。

——一冊は燃え盛る不死鳥の姿が描かれた『E t e r n a l P h o e n i x』という本。

——一冊は幻想的な蝶が描かれた『昆虫大百科』という本。

——そして、無数の海の生物が描かれた『O C E A N H I S T O R Y』という本。

『あとは彼に剣を打ってもらうだけだ、残りの剣と剣士も小僧のもとに自然と集まることだろう。そちらこそ、例の本をあいっから受け取ったのか?』

「なかなかごねられたがな……。」

『光の剣』は懐から一冊の本を取り出す。その本の表紙には巨大な爪痕があり、まるで骨のようなものが内側から生えている。

それをカリバーが確認すると互いに背を向けて逆の方向にあるき出す。

「ついに揃う、十三人の剣士と十三の聖剣。そして、禁断の書」

『世界を救う英雄の物語の』

「『始まりだ』」